

城と史蹟を歩く会第16回 「生実と小弓、2つのおゆみ城を歩く」 ご案内資料

<日時> 平成14年10月8日(火曜日=予備日は10日)

<主要行程> 八幡宿8時52分(2駅) 蘇我9時02分、蘇我駅東入口23分(落井椎名崎行きバス12分) 南生実降車 — 八剣神社 — 小弓城外郭 — 埋蔵文化センター — 小弓城本丸 — 有吉城(遠望) — 大百池(昼食) (バス移動) 生実陣屋外濠 — 重俊院、森川家墓所 — 本丸跡 — 生実神社 — 大手口跡 — 升形跡 — 城下町(バス) 蘇我 — 八幡宿17時ころ着

山岸 弘明

1) はじめに (地名の起こりと主要家々)

- ①生実=古代朝鮮からの帰化人・麻績連(おみのむらじ)とその一族が住みつき、おみがおゆみに。表記ははじめ大弓、小弓で、江戸後期から生実となった。
- ②足利義明(小弓公方)=鎌倉府の正統・古河公方2代政氏の2男に生まれるが、父兄と対立、上総守護武田氏に迎えられ八幡五所?、千葉小弓に居城する。やがて上総、下総、安房を勢力下において、小田原北条氏と関東の覇権を争うが天文7年国府台の戦いで敗死した。市原、千葉は義明の第2?の故郷ともいえる。ゆかり寺、居城跡、伝夫妻墓などの史蹟が多くある。
- ③原氏=鎌倉幕府創設に貢献、上総、下総守護職を勤めた千葉氏の重臣。生実と臼井城を拠点に小弓公方、里見氏と激しく戦った。
- ④西郷氏=徳川家康の側室で2代将軍秀忠の生母西郷局(お愛)の寓家。お愛は夫義勝と死別後、家康に仕え、秀忠と忠吉を生むが28才で逝去。義勝の兄家員が家康の関東入府にしたがって5千石で生実に入った。陣屋地は北小弓城と考えられる。忠員、康員、正員と慌ただしく相続、元和6年加増栄進して東条1万石となった。しかし子孫は旗本に降格、5千石で明治維新へ。
- ⑤森川氏=はじめ堀場氏。家康に仕えた氏俊が母方の森川に改めた。その子重俊が秀忠の側近となり寛永4年生実1万石に入部。9年秀忠の薨去で殉死したが子孫は譜代大名として12代続き、うち若年寄が4、大阪定番が1人出た。

2) 蘇我からバスで南生実へ

- ①蘇我駅東入口9時23分発落井椎名崎行き(バス12分) 南生実35分着、降車。

3) 八剣神社

- ①日本武尊ゆかり、生実の総鎮守。享保元年の社殿再建が起源とされる神楽と神楽書が市の指定に。
- ②小祠の妙見社は小弓城跡からの移し。妙見は千葉一族の守神でゆかり地に残されることが多い。

4) 小弓城外郭跡と堀切跡

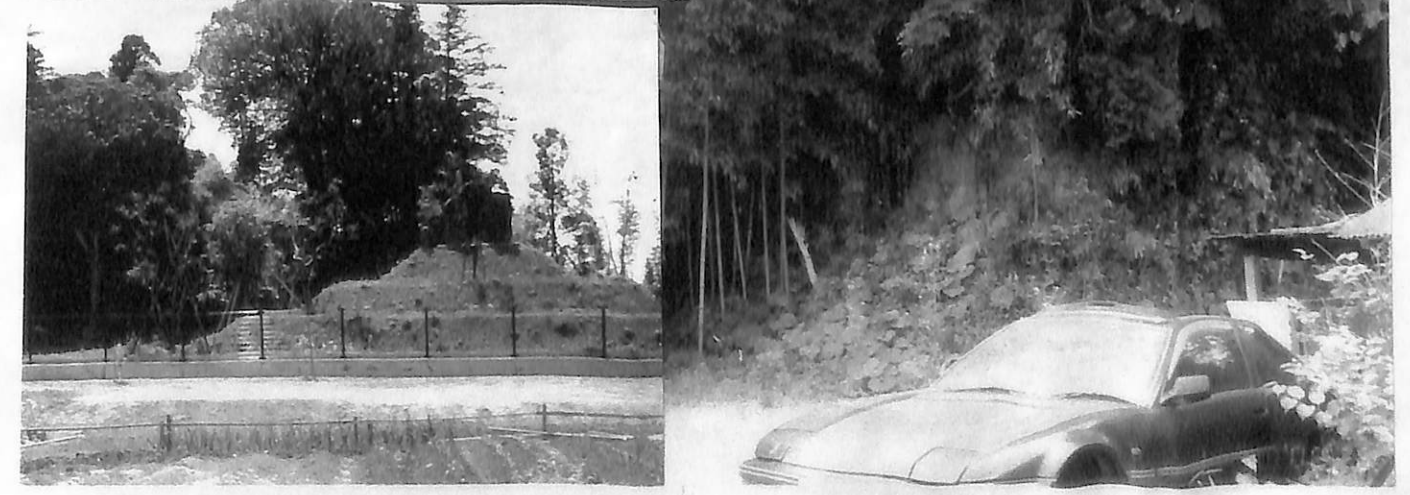
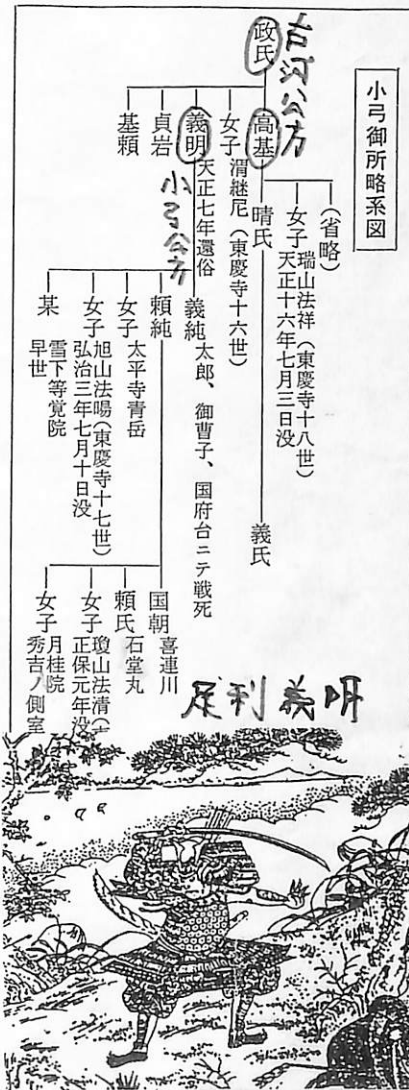
- ①虎口=南門?升形のようにもみえる。
- ②見張台跡=天神社の祠と三山信仰碑を奉るが施錠され立ち入れない。
- ③堀切跡=向かって右が森台、松原といわれた外郭で左が内郭。ともに人工的に作られた平地。削り取られた土砂を押し出して土塁と急崖を作る。中央を走る農道は堀切跡とされるが明確な遺跡はない。廃城時、敵営に利用されないよう土塁、空堀の多くを埋戻したためともされるが、発掘してみないとわからない。
- ④北門跡=城内、外郭の門。簡単な門と番小屋が置かれた。

5) 埋蔵文化財調査センター (小休憩=自由見学)

- ①千葉市には縄文時代の大型貝塚で知られる加曽利貝塚など遺跡が多い。これら出土遺物や調査記録を収蔵し、展示、公開している。遺跡分布模型、復元竪穴住居、主な出土遺物を展示。
- ②南河原坂窯群の復元窯=奈良時代8世紀、須恵器、土師器を量産した窯遺跡。古代窯業生産の実態がわかる。JR土気駅近くの現物は調査後、地中深く埋め戻された。

6) 大覚寺古墳 (遠望)

- ①千葉市内最大の前方後円墳。全長66m。県の史蹟で公園として保存されている。全景を望む。5世紀はじめ造営。命名は後の大覚寺敷地から。北方にもう1基前方後円墳があったが消滅した。



7) 小弓城 (原、小弓公方義明居城)

- ①中鼻=埋蔵文化財遺跡センターが大手口。守りの最前線。取り囲む道路は空堀跡? 馬出?  
 ②空堀=深い空堀、かなり埋まって更に数m。現在の道は後世。攻撃の行く手を遮る。  
 ③土橋=草深く立ち入れないがこの先に土橋(現存)。中鼻と主郭を結ぶ。緊急時は壊す。  
 ④土塁、横矢、見張台=かつて土塁と柵を巡らす。1段高いコーナー部に見張り台。井楼を立て味方  
 砦からののろし連絡、敵兵の動きを監視する。横矢は空堀からの攻め手を封ずる。  
 ⑤台(2の丸相当)=千人溜、太鼓郭などと呼ばれることも。兵の集結場。戦況に応じて出陣する。  
 ⑥森台貝塚(城とは直接関係ないが)=縄文時代の貝塚跡。かつて海浜近い高台であったことがわか  
 る。現在でも貝殻破片が採集できる。  
 ⑦妙見社跡=千葉一門の守り神。八剣神社に合祀。  
 ⑧腰郭=斜面に腰郭が続く。重臣邸を配し、戦時はそれぞれが守りの拠点に。  
 ⑨主郭(本丸相当)空堀と土塁=内側高台の本丸最後の守り。土塁切断面は単に土を盛り上げた造り。  
 叩き土居、芝土居などではなさそう。わざと曲折させて横矢を作る。  
 ⑩主郭=やや高地に開削された丘城。現在は畑地と墓地。最近まで周囲の一部に土塁跡が残ったとい  
 う。土塁上を柵で囲み、中央に居館が置かれたものと考えられる。  
 ⑪教育委員会史蹟表示板(要旨)  
 中世、千葉城南の守りとして築かれ重臣原氏が居住。永正15年、真里谷武田氏が古河公方の弟義明  
 を奉じて落とした。義明はここを本拠に小弓御所とも呼ばれるようになり、里見氏の  
 支援をえて後北条方の千葉、原氏と争った。天文7年、義明は国府台の戦いに戦死し、再び入城し  
 た原氏が新たに北小弓城を築いて本拠とした。城は南と西側は水田で北は支谷に、東は大百池に画  
 された台地で古城、東堀、城出下などの地名も残されている。  
 ⑫生実藩蔵屋敷跡(浜野城=今回は見学しません)  
 浜野駅近い本行寺隣に海水を取り入れた水濠跡、蔵跡、船溜などの遺構が残る。  
 柴屋(さいおく)軒宗長の「東路のつと」に永正6年(1509)原宮内大輔胤高?の小弓の館の前、  
 小浜の本行寺に宿泊とある。小弓城と混同されてきたが小弓城の支城・浜野城と考えたい。

8) 大百池公園 (無料=昼食)

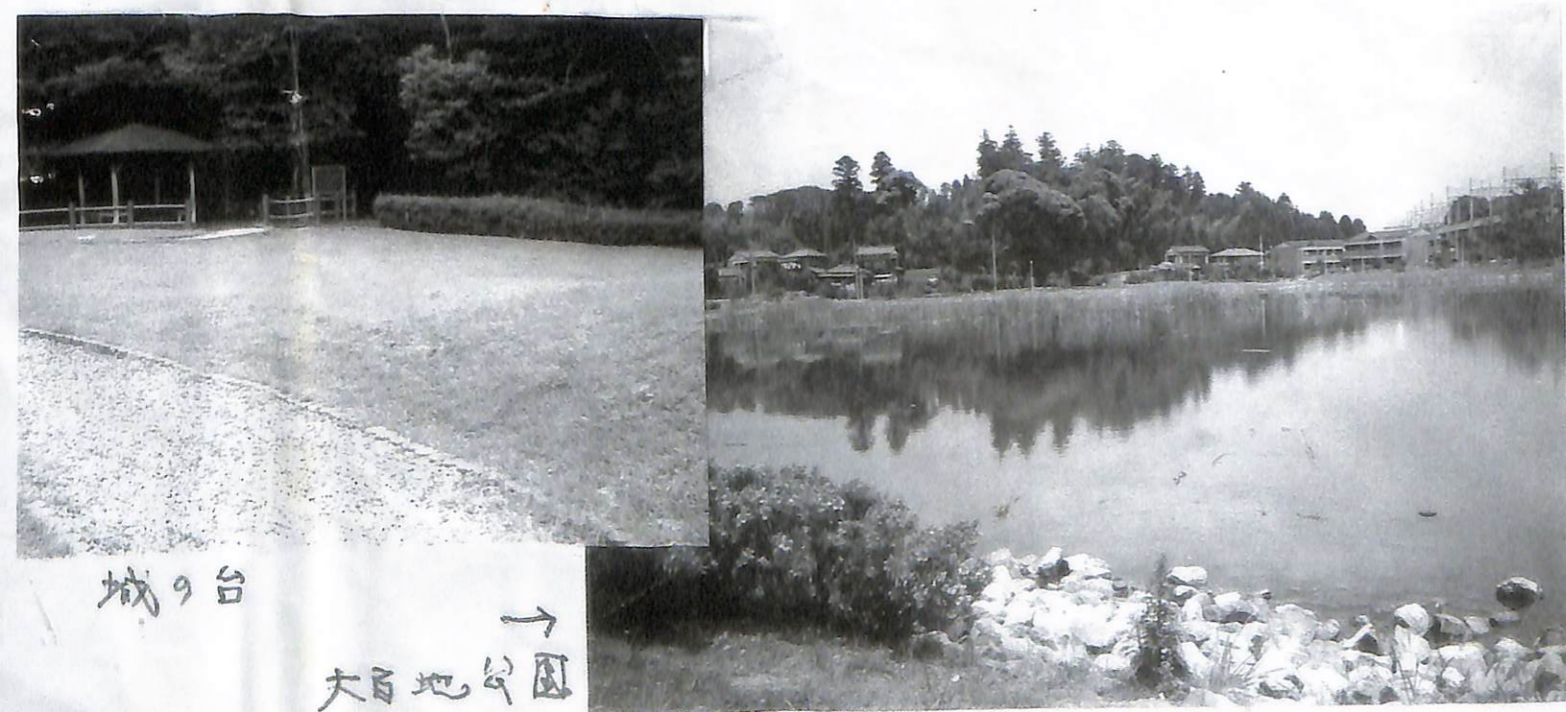
- ①教育委員会史蹟表示板(要旨)  
 古代、麻積氏の開発という。麻布を生産するためこの地で布を晒したことが池名のおこり。  
 ②中世、城の防御の要所となり、南生実の灌漑貯水池とされた。現在は自然観察のできる親水公園と  
 して整備、一般開放されている。

9) 有吉城(城の台=遠望)と小弓城の落城

- ①天文7年の国府台の戦いに勝った北条勢は余勢をかって下総、上総を迫撃、義明の本拠小弓城を一  
 望に見下ろす城の台に本陣を構える。城攻めの一役で遺構はほとんど残っていない。  
 ②対する留守将は佐々木、辺見、町野ら。抵抗も虚しく落城。小弓に原氏が復帰した。  
 ③小弓公方の客将里見義堯は敗走の途中、小弓城に立ち寄り、幼い子女らを自らの房州に伴う。  
 女房たち280余人「平家の大将宗盛の都落ちも、これにはいかで、まさるべき」義明の愛妾あひす  
 自害「思っているみはふか草の秋の露 たのしみしきみは 木からの風」(国府台戦記)  
 ④のち孫娘月桂院が豊臣秀吉の側室となり、兄国朝、頼氏が喜連川足利の名跡を継いで1万石で明治  
 維新におよんだ。

10) バスで生実陣屋へ移動

- ①南生実13時18分発千葉行き(バス3つめ3分)御寺前降車(次のバスは14時00分発)



11) 生実池 (陣屋外堀)

- ①北小弓城、生実陣屋時代を通じた外濠。城を囲むように流れる外堀? 川が水源。  
 城北辺は守りを兼ねた沼地と水田、周辺田畑の灌漑用水の役割も果たした。  
 ②重俊院側の小さな公園は隠れたお花見の名所。春の休日、家族連れや職場仲間が訪れる。

12) 重俊(ちょうしゅん)院 (森川氏菩提寺)

- ①曹洞宗の寺。森川山重俊院。初代藩主重俊菩提のため創建、寺名も重俊に由来。  
 ②森川氏城址碑=後ろ向き。前任職が宅地開発で行き場を失った石碑を仮に置いたためという。  
 ③山門=倒れそう。元禄ころ、4代俊胤の室、亀井豊前守の女が化粧料で寄進。青瓦、シャチが格式  
 を物語る。  
 ④本堂=かつての伽藍は昭和49年焼失、現在の建物は鉄筋コンクリートの再建。

13) 森川氏墓所 (別紙参照)

- ①旧北小弓城の一部で空堀の痕跡が残る。  
 ②正面巨大な板碑型墓碑<重俊院殿前羽州大守活国正英大居士>と<宗仙院殿洞雲永中大姉>は初代  
 重俊夫妻。正室は大久保忠隣(忠隣)の養女。大久保忠隣事件に連座して一時酒井家次に預けられるが、大  
 坂の陣のとき家次に属して軍功をあげて許された。秀忠側近として西の丸老中にすすみ、寛永9年  
 秀忠に殉死した。  
 ③以下、2代重政、3代重信、4代俊胤ら歴代藩主室墓が並ぶ。  
 ④五井高2千石、享保11年9月16日4名同日自決とした板碑型墓碑は一門子孫を称するお宅に現存す  
 る系図を根拠に建立された新しい供養塔。五井歴史年表にも記載されたが史実ではない。

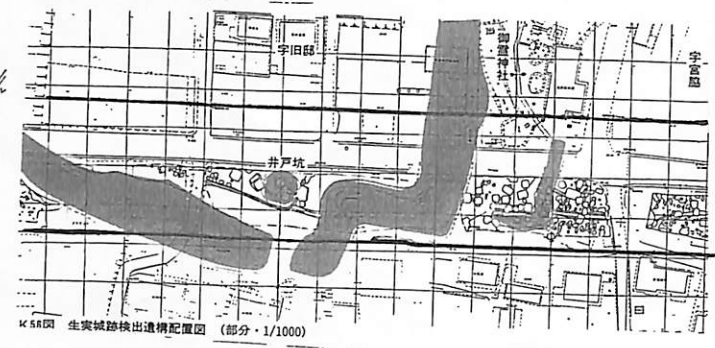
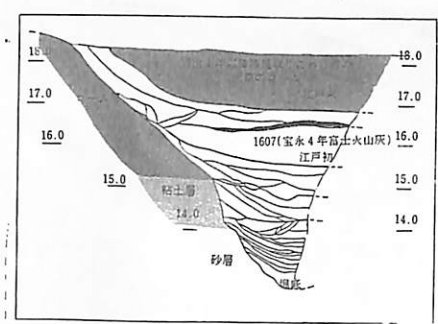
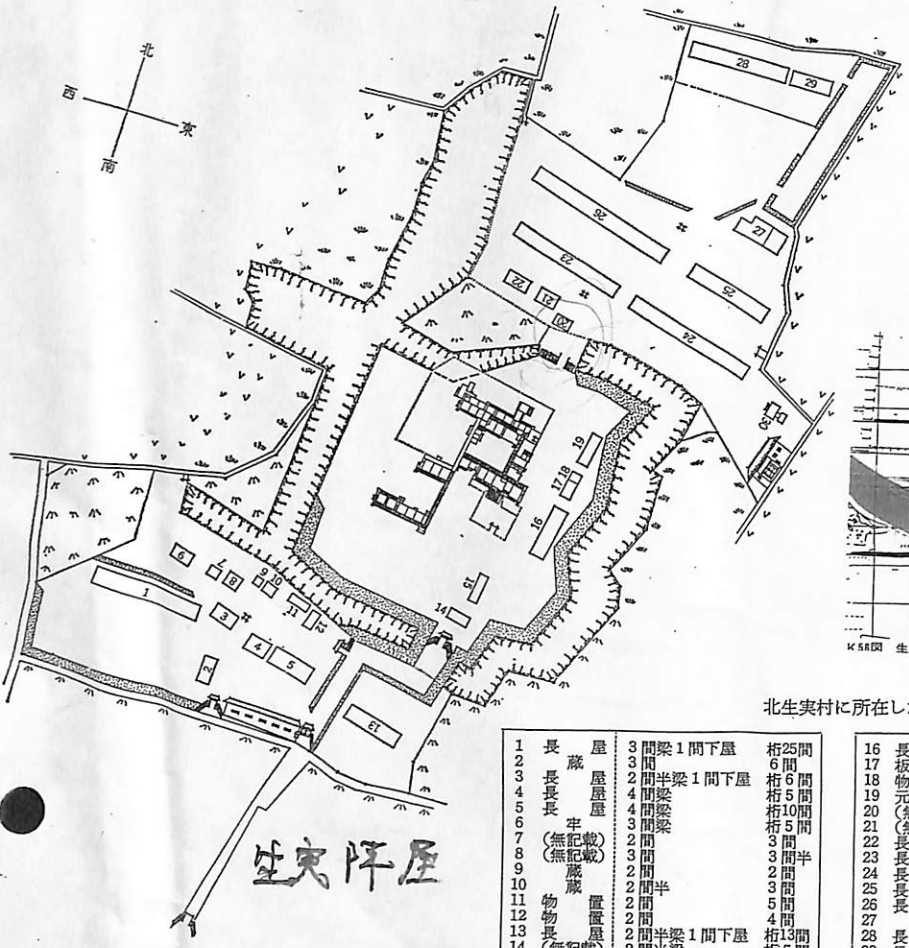
14) 北小弓城跡

- ①中世原氏居城、西郷氏陣屋?、森川氏詰城。(小弓公方時代説もある)  
 ②天文8年小弓城から移し明治維新まで。北側に高く南に向かってなだらかに傾斜している。さして  
 要害ともいえない広い台地に高度の築城技術で、郭を放射状に集中させた。周辺に出丸、ネゴヤを  
 置いたが、天正18年、豊臣秀吉の小田原攻めで原胤栄が野田十文字野(千葉市誉田)の戦いで討死、  
 滅亡。江戸時代に入り森川氏が平地部分の郭を陣屋、本丸部分を詰城とした。  
 ③本丸など主要部は大規模宅地造成で消滅。本城公園に史蹟表示板がある。

15) 生実陣屋本丸跡

- ①本丸御殿跡。別図=間取図参照。他陣屋とくらべ小規模。  
 ②明治7年廃城。かつて本丸殿舎を連ねたが現況は住宅地と草地。地形が当時の痕跡を伝えている。





北生実村に所在した藩陣屋絵図 (高梨広理氏旧蔵)

|    |   |   |   |     |   |     |      |    |       |     |   |     |      |
|----|---|---|---|-----|---|-----|------|----|-------|-----|---|-----|------|
| 1  | 長 | 屋 | 3 | 間梁  | 1 | 間下屋 | 桁25間 | 16 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁12間 |
| 2  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁6間  | 17 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁4間  |
| 3  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁6間  | 18 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁4間  |
| 4  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 19 | 元     | 演武場 | 2 | 間半梁 | 桁8間  |
| 5  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 20 | (無記載) |     | 2 | 間半梁 | 桁4間  |
| 6  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 21 | (無記載) |     | 2 | 間半梁 | 桁4間  |
| 7  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 22 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 8  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 23 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 9  | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 24 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 10 | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 25 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 11 | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 26 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 12 | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 27 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 13 | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 28 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 14 | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 29 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |
| 15 | 長 | 屋 | 3 | 間半梁 | 1 | 間下屋 | 桁5間  | 30 | 長     | 屋   | 2 | 間半梁 | 桁6間  |

7月

- 16) 生実陣屋と本丸空堀
- ①生実神社に教育委員会説明板3枚。空堀と土塁が現存。
  - ②生実城と生実陣屋説明板(要旨)  
天文8年~天正18年、50年間の丘城。幾多の攻防戦が展開された。江戸時代は城の一部が陣屋に改められ、寛永4年から幕末までの240年間、幕府の要職についた森川氏の城下町として、また、房総往還の交通要路として栄えた。
  - ③古城跡森川内膳正陣屋の絵図 天保8年図。戦国時代の城を詰めの城とした陣屋の構成がよく判る。
  - ④空堀土層断面図 発掘調査図
  - ⑤空堀=屏風折れ、横矢。  
現況は深さ5mほどのU字堀だが、さらに5mほど下に戦国時代のV字堀を検出。堀底から享禄4年銘板碑型庚申塔や香炉、かわらけに混じって敵将戦死者や死馬の投棄、貝殻なども発掘された。
  - ⑥土塁

- 17) 生実神社 (城、陣屋の守神)
- ①元中世創建の御霊神社という。北小弓城に入った原氏が勧請、近世では生実藩主の森川氏が崇拜した。秋には古式の湯立神事や村歌舞伎が上演される。
  - ②石鳥居 ③社殿

- 18) 大手口碑
- ①陣屋正門。ここからが城内。周辺に大手門の土塁、空堀一部が残る。
  - ②500m先に大堀切(城との関係は未詳)、すすんで土気道へ出る。

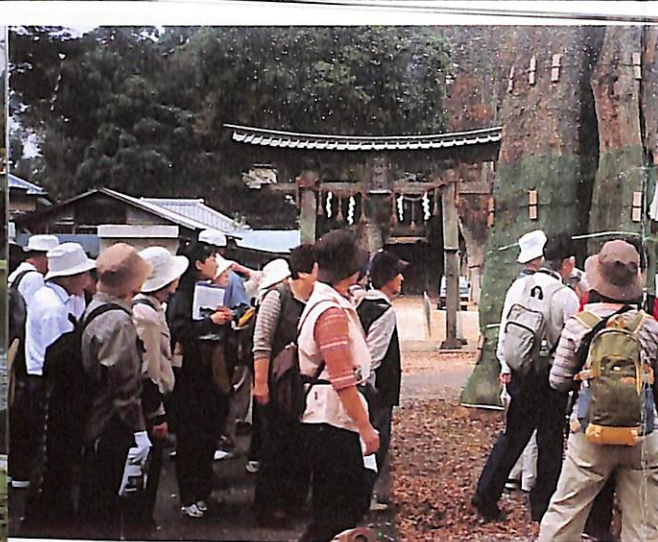
- 19) 城下町
- ①総構え城下。大手口入って陣屋を迂回する形でクランク。町並と呼ばれる城下は上宿、中宿、下宿に分かれ、陣屋周辺に武家屋敷が置かれた。
  - ②昔懐かしい火の見櫓。周辺に旧藩士子孫は多く、当時の建造物も現存していない。
  - ③バス停御寺前周辺は寺町。本満寺、大覚寺(移転)などに旧藩士は墓も。

- 20) バスで蘇我駅に戻る
- ①生実坂下16時27分発千葉行き(12分)蘇我駅東入口25分着(予定)  
または御寺前 16:09, 19, 39, 49





大百池公園での記念写真



八剣神社



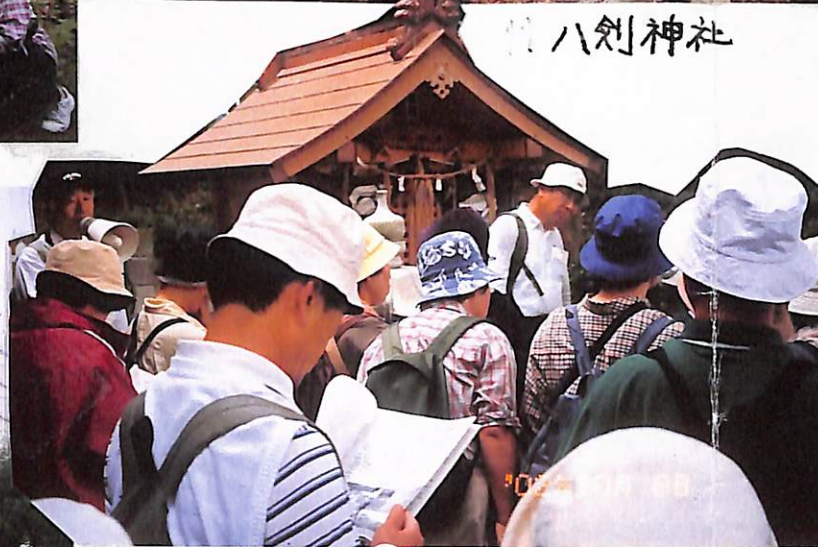
重信院山門と本堂



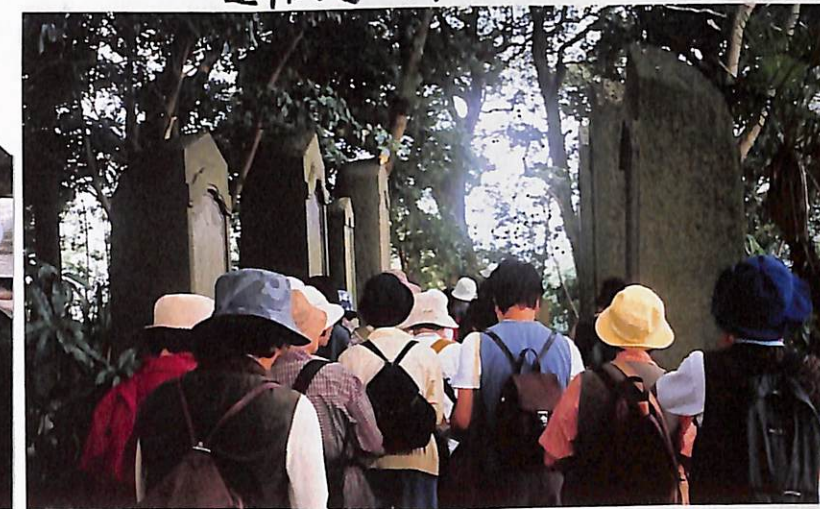
↑遺跡口へ



重信院にて



妙見社の小祠



森川氏歴代の墓所



↓生実陣屋外縁



↓北小弓城  
大手口碑



城と史蹟を歩く会第16回「生実と小弓、2つのおゆみ城を歩く」

ALBUM 平成14年10月8日

主要コース  
 八剣神社、埋蔵文化財センター、小弓城跡、大百池、生実池、重信院、北小弓城跡、生実陣屋跡、生実神社、大手口碑、升形跡、生実城下

参加者40名(敬称略、あいうえお順)  
 石井洋子、石原志津子、板垣てる、猪野春枝、板倉 満、岩村ユウ、大谷安弘、岡本千代、荻田恵子、小倉すみ、加藤幸子、金子昭夫、桑原絹代、佐倉光子、洪木奎吾、洪木恵美子、白土定子、鈴木クニ子、鈴木 満、鈴木洋子、高沢 毅、高城正雄、高城富子、竹内 克、竹上 茂、武見俊治、田中秋乃、近久芳彦、千葉範子、続木 暉、永山寛一、西村澄子、藤田康男、松川綾子、吉水正子、山岸弘明、小出惣治、高沢恒子、鷺津寛子、藪本テイ子

第14回(夏季研修会)参加者31名(敬称略、あいうえお順)  
 石井洋子、石原志津子、板倉 満、今井典夫、岩村ユウ、大岩勝男、小北絢士、荻田恵子、小倉すみ、桑原絹代、佐倉光子、洪木奎吾、鈴木 満、高沢毅、高城正雄、高城富子、武見俊治、外山庄作、西村澄子、松川綾子、吉水正子、秋葉 平、板倉 満。講師=竹内 克、山岸弘明、国分三男、小出惣治、高沢恒子、鷺津寛子、藪本テイ子(第15回は連続雨天のため中止)



北小弓城



生実神社↑  
村がたて  
碑台



生実陣屋跡

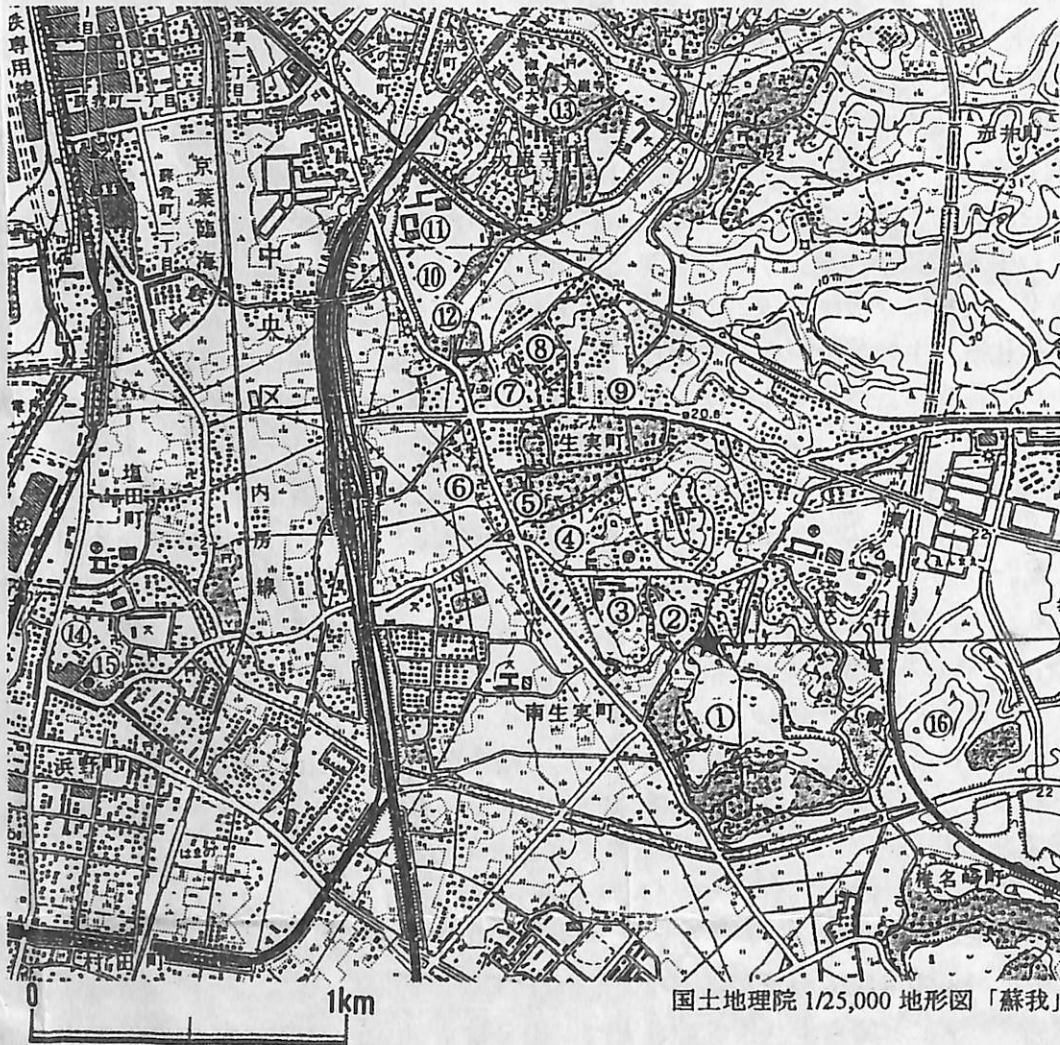


↓夏期研修会(8-11)



←生実陣屋と北打向の柵型アト

# 生実周辺の歴史マップ

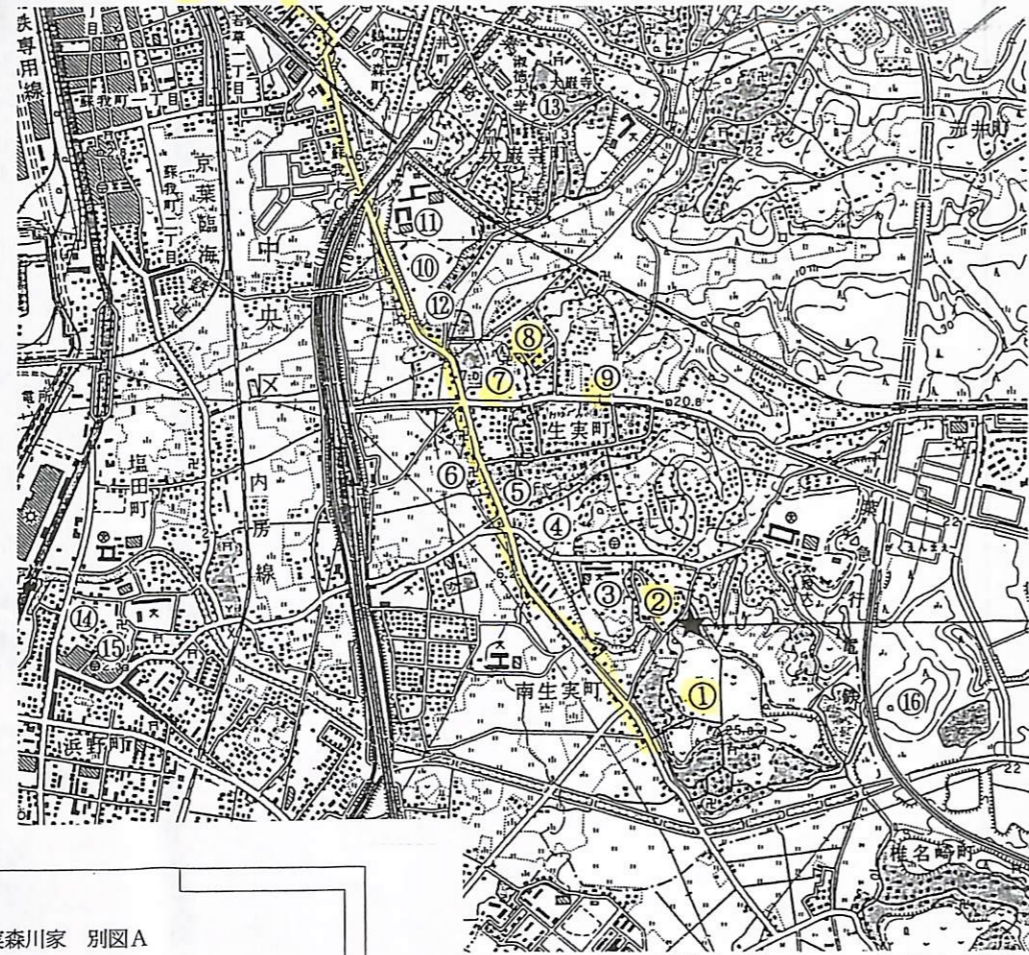


千葉市埋蔵文化財調査センター

- ① **小弓城跡** おゆみ 従来、小弓公方足利義明がいたところとされてきたが、疑問が多い。城郭の姿は小弓公方の時期よりも新しい可能性が大きい。主郭東側には、戦後まで深い堀が残っていた。北側の埋蔵文化財センター脇に大規模な空堀が残る。国境まじかに位置し、上総に直接対峙する戦略的要衝である。一部に貝殻の散布が見えるのは、縄文時代の森台貝塚である。城内には生実の総鎮守という八剣神社もある。
- ② **大覚寺山古墳** だいかくじやま 市内最大の前方後円墳。全長 66 m。県の史跡に指定され、公園として保存されている。5世紀初め頃の造営。付近には、北方に消滅したが別の前方後円墳があったとされ、もう一基が明德高校敷地内に残っている。近くに古墳の名前の由来となった大覚寺があったが、大正 12 年に北生実町の本満寺隣の現在地に移った。
- ③ **七廻塚古墳** ななめぐりづか 生浜東小学校の校庭にあった直径 34 m・高さ 9.5 m の大型の円墳。塚の名前は、この塚を片足で左から七廻りすると、美女が機を織る姿が現れるという伝説にちなむ。校庭拡張に伴う発掘調査により、滑石製大型腕飾や石製模造品・銅鏡などが出土した。出土遺物は市文化財に指定され、千葉市埋蔵文化財センターに展示してある。
- ④ **長山砦跡** ながやま 生実城の支城で土塁があったとされるが、現在では詳細不明。
- ⑤ **妙印寺跡** みょういん 日泰の開基による顕本法華宗寺院。明治 41 年に本満寺に合併した。日泰はこの寺に在住して本満寺を創立したといわれる。創建年代は未確定だが、文明元年から 5 年の間のことである。この場所は生実城の南西端の見晴らしのよい高台で、城の南側の重要拠点に位置しており、寺の創建は城の造営と何らかの関連があろう。現在墓地が残る。文政 7 年 (1824) の「草苺川堰開關祖 高室氏碑」もある。高室氏は、近世初期に生実を領した西郷氏の後に幕領となった時代の代官高室金兵衛のこと。元和 8 年 (1622) に草苺堰が竣工した。

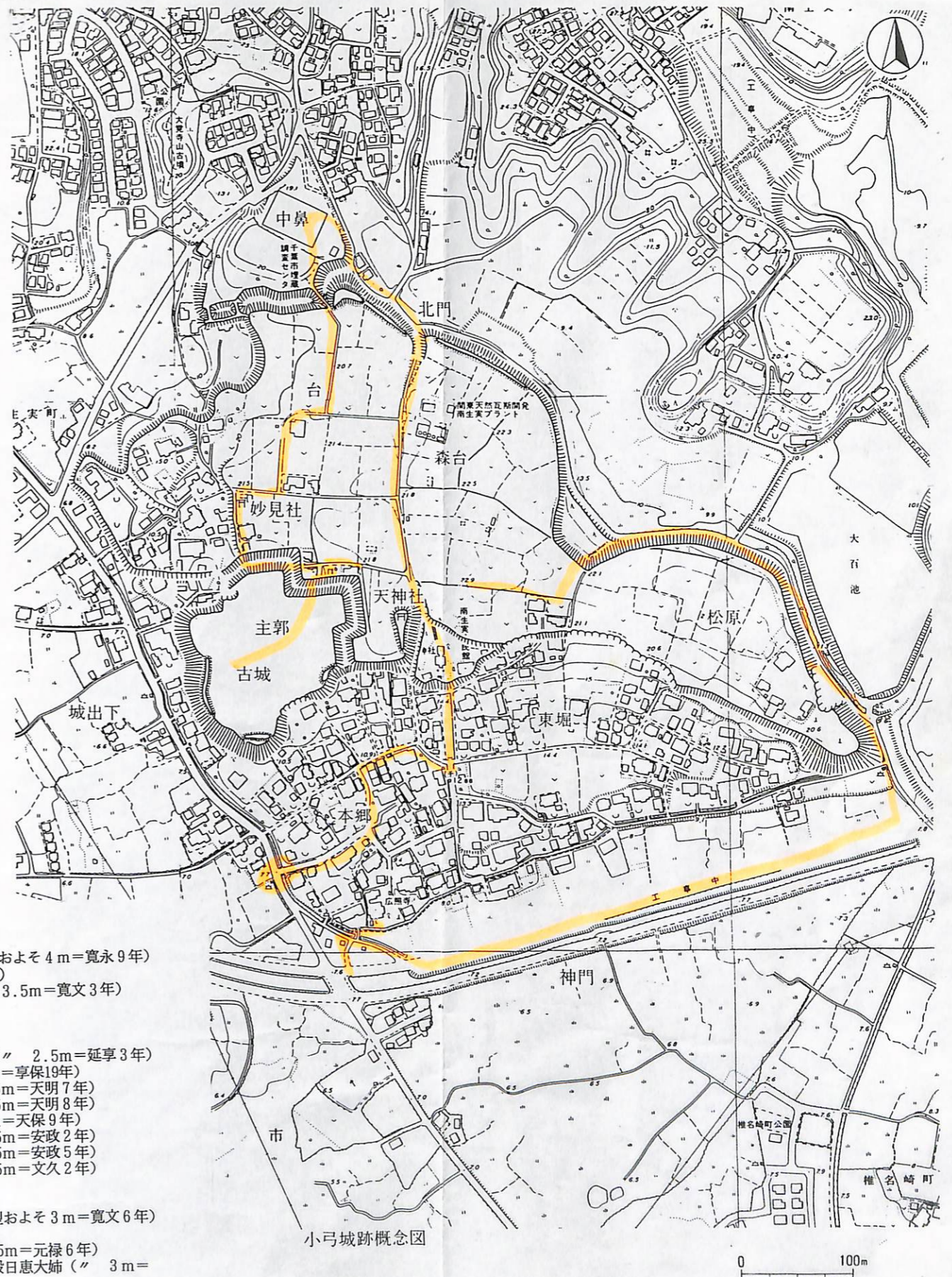
同じマップ

- ① 小弓城
- ② 大覚寺台墳
- ③ 長山岩
- ④ 金供院
- ⑤ 生実博士
- ⑥ 生実神社
- ⑦ 浜野城 (菅原氏)
- ⑧ 本行寺
- ⑨ 城台



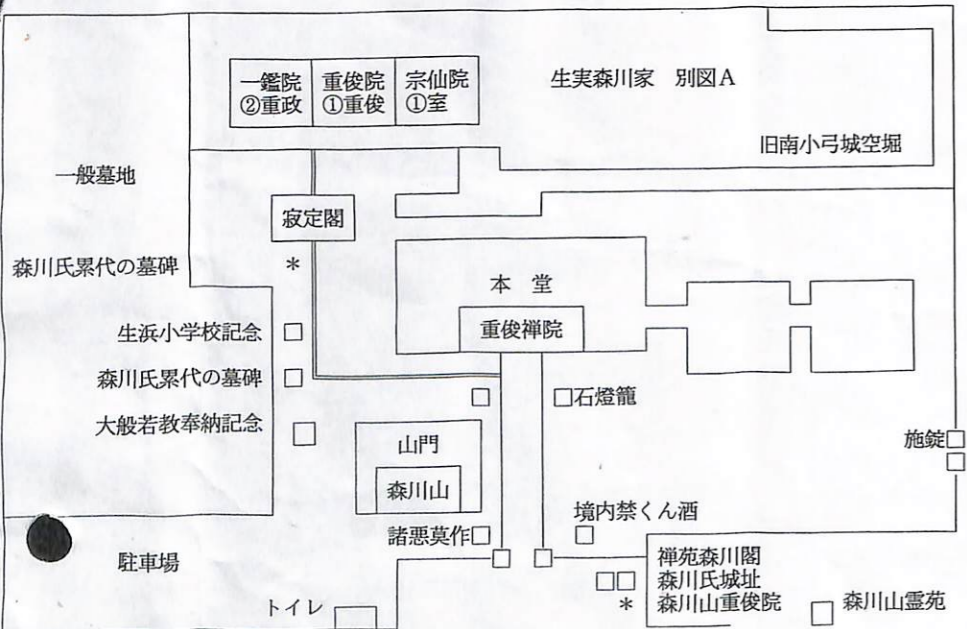
国土地理院 1/25,000 地形図「蘇我」

千葉市埋蔵文化財調査センター

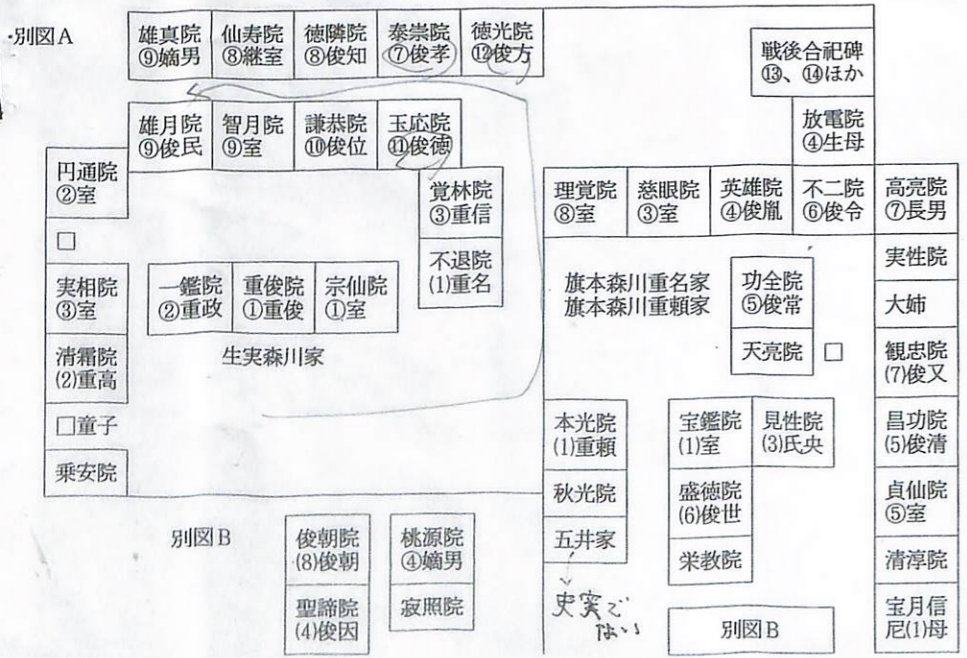


小弓城跡概念図

0 100m



平成12年調べ



金供院

主要墓碑

- 生実森川家
- ① 重俊 = 館重俊院殿前羽州太守 正英大居士神儀、源朝臣森川重俊公 (駒型およそ4m=寛永9年)
  - ①' 室大久保忠隣養女 = 館宗仙院殿河内永中大姉淑位 (" 4m=寛文6年)
  - ② 重政 = 館一鑑院殿前伊州太守 録微全限大居士神儀、源朝臣森川重政公 (" 3.5m=寛文3年)
  - ②' 室板倉重富娘 = 円通院殿性空妙真大姉 (宝きょうおよそ3m=正保2年)
  - ③ 重信 = 覚秋院殿月窓知閑大居士、前羽州太守源朝臣重信 (" =宝永3年)
  - ③' 室井上正利娘 = 実相院殿真如木空大姉 (駒型およそ2.5m=元禄3年)
  - ④ 俊胤 = 英雄院殿朝散大夫前出羽入道一之頭空大居士神儀、源朝臣森川重胤公 (" 2.5m=延享3年)
  - ⑤ 俊常 = 功全院殿前朝散大夫忠林玄心大居士神儀、源朝臣森川俊常公 (" 3m=享保19年)
  - ⑥ 俊令 = 不二院殿前朝散大夫 関善応大居士神儀、源朝臣森川俊令公 (" 2.5m=天明7年)
  - ⑦ 俊孝 = 泰崇院殿前紀州太守 賢元隆道大居士神儀、源朝臣森川俊孝公 (" 2.5m=天明8年)
  - ⑧ 俊知 = 德隣院殿朝散大夫 忠宗恭大居士神儀、源朝臣森川俊知公 (" 2.5m=天保9年)
  - ⑨ 俊民 = 雄月院殿前紀州太守 徳山含章大居士神儀、源朝臣森川俊民公 (" 2.5m=安政2年)
  - ⑩ 俊位 = 謙恭院殿前羽州太守 儀山公賢大居士神儀、源朝臣森川俊位公 (" 2.5m=安政5年)
  - ⑪ 俊徳 = 玉庇院殿前羽州太守 真空静繁大居士神儀、源朝臣森川俊徳公 (" 2.5m=文久2年)
  - ⑫ 俊方 = 徳光院殿文誉仁興 芳大居士 (" 2.5m=明治10年)
- 旗本森川重名家 (寛政譜7-97=6,000石)
- (1) 重名 = 館不退院殿前総州太守 鉄征英肝大居士神儀、源朝臣森川重名公 (駒型およそ3m=寛文6年)
  - (1)' 室 = 宝鑑院殿心光純清大姉 (" 1.5m=享保2年)
  - (2) 重高 = 清霜院殿前野州太守 風山濃微大居士神儀、源朝臣森川重高公 (" 2.5m=元禄6年)
  - (3) 俊央 = 見性院殿前総州太守 指浄心大居士神儀、源朝臣森川重央公、妙寿院殿日恵大姉 (" 3m=元禄6年、享保7年)
  - (4) 俊因 = 聖諦院殿前紀州太守 廓然義道大居士神儀、源朝臣森川重因公 (" 2.5m=明和元年)
  - (5) 俊清 = 昌功院殿前総州太守 忠親義大居士神儀、源朝臣森川重清公 (" 2.5m)
  - (6) 俊世 = 盛徳院殿前豆州太守 雲静山大居士神儀、源朝臣森川重世公、□源院殿真空浄口大姉 (" 2.5m=寛政4年、天保9年)
  - (7) 俊又 = 観志院殿直道義正大居士神儀、源朝臣森川重又公 (" 2.5m=文化6年)
  - (8) 俊朝 = 俊朝院殿前豆州太守 泰稔鶴雲大居士神儀、源朝臣森川俊朝公 (" 2.5m=慶応元年)
- 旗本森川重頼家 (寛政譜7-100=6,000石)
- (1) 重頼 = 本光院殿雲江英口居士、前出羽守重俊3男八郎衛門重久 (駒型およそ1.5m=延宝4年)
  - (1)' 生母 = 宝月妙珠信尼 (卵塔1.5m=万治元年)

約五井家研究 架空、話

森川氏五井高2千石、慈光院殿大徳俊勝清居士佐守俊勝58才、長光院殿徳照妙信清大姉俊勝室須和52才、浄光院殿清照俊尹祥居士八郎右衛門俊尹30才、清光院殿浄照徳室大姉俊尹室伊都23才、享保11年5月16日4方同日自決 (駒形およそ1.5m=享保11年)

⑥本満寺 文明5年(1473)本行寺開山の日泰によって創建されたという。京都の妙満寺派の顯本法華宗に属す。

⑦重俊院 生実藩主森川氏の菩提寺、曹洞宗。藩祖森川重俊を名前の由来とする。

⑧生実城跡 生実原氏の居城。通説では小弓公方滅亡後、小弓城からここに移ったというが、発掘調査では小弓公方時代の遺物が検出されており、通説には疑問が多い。近世には、この生実城に小弓公方がいたと考えられていたようである。畝堀を伴っており、16世紀後半に大規模な改修を行っている。技巧をこらした縄張りで、戦国盛期の発達した城の姿をみせる。主郭部分が残っていないのは惜しまれる。生実神社の西側には森川氏の陣屋があった。森川氏は、寛永5年(1628)から明治4年の廃藩置県までの生実藩主。明治4年に生実県となるが、同年11月に印旛県に統合された。

⑨生実神社 もとは御盃神社といふ『千学集抜粹』にもみえる中世以来の神社。生実城の鎮守として原氏によって勧請されたものと思われる。近世には生実藩主森川氏に崇敬された。10月に行われる湯花進献式は、古式を残す湯立神事である。神社西側には空堀が残り、生実城跡の遺構を直接みる事が出来る数少ない場所である。

⑩八幡神社跡 字柏崎台の台地は八幡山ともいわれ、かつて八幡神社があった。台地上には、頼政神社や宗徳寺もあった。宗徳寺は原氏による建立とされ、天正3年(1575)に原氏が臼井城に移るとともに臼井に移された。柏崎台南方の水田部分には「妙見下」という小字もあり、柏崎台一帯は宗教色の強いエリアである。

⑪柏崎砦跡 詳細不明ながら、生実城の支城と考えられている。

⑫威光院跡 八幡神社の別当寺威光院が台地下にあった。この寺は字横宿に創建され、のち字柏崎宗徳寺跡へ移されたともいう。文和二年(1353)銘の薬師如来銅像があったといい、中世からの寺院であったことは間違いない。

⑬大蔵寺 浄土宗関東十八檀林のひとつ。山号は竜沢山。天正中、原胤榮夫妻を開基に、道善貞把を開山として創建されたというが、創建年代は天文22年とも永禄3年ともいい定かではない。関東寺院のなかでも最も早い時期に、徳川家康と関係を持っていたため、原氏滅亡後は幕府の祈願所および檀林として栄えた。元禄年中には26ヶ寺の末寺があったという。

⑭浜野城跡(生実藩蔵屋敷跡) 近世には生実藩の浜御蔵がここに置かれ、浜野は物資の積み出し港としてにぎわいをみせた。御蔵の跡は蔵屋敷跡とも呼ばれていたが、発掘調査により、生実城跡と同じ時代の遺物が検出され、中世から港として使われていたことが明らかになった。「城ノ内」という地名や、絵図・地籍図等の検討から、ここが中世城郭であったと考えられるようになってきた。城の範囲には、本行寺も含まれていたとみられる。港の城郭の事例としては、数少ない重要なものである。

⑮本行寺 文明3年(1469)日泰上人を開基とする京都妙満寺派の顯本法華宗寺院。日泰は、酒井小太郎定隆との上総七里法華の伝説で知られる高僧。永正6年(1509)10月に連歌師宗長が、原氏の館を訪れた際にこの寺に泊まったことが『東路の津登』にみえる。

⑯城ノ台遺跡 地名から城跡と考えられているが、詳細は不明。発掘調査により戦国期の遺構や遺物も検出されているが、城とは認めにくいものである。大百池を含め公園として整備されている。

生実藩蔵屋敷跡 (千葉市中央区浜野町字蔵ノ後)

**立地** 生実藩蔵屋敷跡は旧下総・上総の境である村田川河口より北へ1km程の東京湾に面した位置にあり、埋立てにより海岸線とは現在離れているが、標高2m程の浜堤上を利用している。北に塩田川が流れ、南は日蓮宗の本行寺に接している。陸路では内房・外房の分岐点、海路では品川など東京湾に通じる交通の要衝地である。

**構造の概要** 南北に浜堤に位置し、地表面観察による造成遺構の確認は不可能であるが、地図・地籍により旧状は捕らえられる、長軸南北約200m、短軸東西約100mである。周囲は水田となっている。

基本的な構造はほぼ同心円状になる、内郭(御蔵)と外郭(城ノ内)からなる複郭の造りである。内郭(御蔵)は長軸南北約130m、短軸東西約93mの長方形で4辺とも水堀と土塁により囲まれる。外郭(城ノ内)は幅約29m程の三日月形を呈し、西辺を除く3辺とも水堀と土塁により囲まれる。古絵図によれば内郭(御蔵)には長屋門・米蔵らしき建物が描かれている。昭和58年に行われた遺跡の北側の発掘調査では蔵の遺構は検出されていないが、蔵屋敷以前の戦国時代(15世紀後半、16世紀)の遺構・遺物が検出された。規模的には近世の蔵屋敷と近似しており、本遺跡が戦国時代よりの系譜をひく遺跡であることが判明した。

**城の歴史** 浜野町地域は戦国時代に浜の村(「東路の津登」)とよばれ、原宮内少輔胤隆の所領であったことが知られている。周辺には本行寺や八坂賣の社の存在や「砂浜から人骨が出る」といった伝承があり、この地が無縁の地・「市場」が存在していた可能性も指摘できよう。本遺跡は交通の要衝地であったため原氏、小弓公方・上総武田氏・安房里見氏が幾度となく生実の奪い合いを繰り返している地域であり、本遺跡の成立は戦国時代に生実城主原氏が「城下」である生実浜野の港や市場を守るために、または支配するために「城」を設けたことによると推測されよう。

天正18年(1590)に原氏が滅んだ後は徳川氏の家臣である西郷氏や森川氏により引き継がれ、改変を受け蔵屋敷として使用されたと考えられるのではないだろうか。(木内)



生実藩蔵屋敷跡概念図

生実城の遺跡  
戦国時代の海城?  
林川谷  
あり

ふるさとこの城  
房総の城跡めぐり

千葉市▷7

生実藩の蔵屋敷は、千葉市中央区浜野町にあり、江戸時代中期に築かれた。この遺跡は、戦国時代から江戸時代にかけての歴史を物語る重要な遺構である。周囲は水田となっており、かつての海岸線とは現在離れている。

陸・海上交通の要衝  
年貢米や輸送船を管理

三浦半島の南端に位置する生実藩は、寛永五年(1628)に設けられた。この地は、江戸時代を通じて陸・海上交通の要衝地として重要な役割を果たした。年貢米の輸送や船隻の管理が行われていた。また、この地には「市場」が存在していたと推測されている。

生実藩蔵屋敷 ①

ふるさとこの城  
房総の城跡めぐり

千葉市▷8

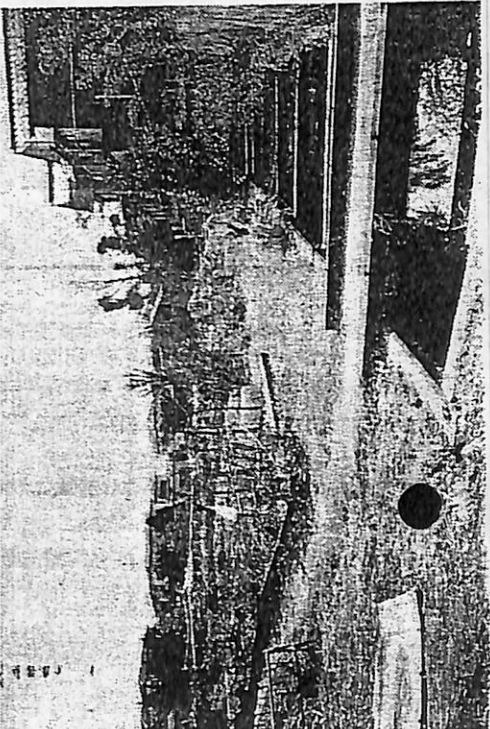
生実藩蔵屋敷跡(千葉市中央区浜野町)は、旧下総・上総の境にあり、江戸時代中期に築かれた。この遺跡は、戦国時代から江戸時代にかけての歴史を物語る重要な遺構である。周囲は水田となっており、かつての海岸線とは現在離れている。

時代異なる「屋敷」存在  
港や市場の支配で設置

生実藩蔵屋敷跡は、戦国時代から江戸時代にかけての歴史を物語る重要な遺構である。この地は、江戸時代を通じて陸・海上交通の要衝地として重要な役割を果たした。年貢米の輸送や船隻の管理が行われていた。また、この地には「市場」が存在していたと推測されている。

生実藩蔵屋敷 ②

この地は、戦国時代から江戸時代にかけての歴史を物語る重要な遺構である。周囲は水田となっており、かつての海岸線とは現在離れている。



生実藩蔵屋敷跡の位置(明治十一年時)



生実藩蔵屋敷跡の位置(明治十一年時)



東の戦国時代を研究する上で無視することの出来ない二つのおゆみ城跡(小弓城と生実城)が残されている。

小稿では、城郭を攻防戦のための軍事施設としてみる視点よりも、経済的、および交通史的な視点で、戦国時代を通じてこの地域が戦略上の要衝として位置付けられていたのかを、考えてみることにしたい。

また、唯一ニュータウン建設に伴う発掘が実施され、小弓城について考える上で重要となる有吉城についても触れてみたい。

### 一 小弓城について

千葉市中央区南生実町に所在し、南と西を沖積平野に、北は支谷に、東は大百池に、それぞれ画された標高一〇〜二三mの台地一帯が城跡である。城跡は東西四〇〇m、南北四五〇mの規模を有する。城跡内やその周辺には「古城」「東堀」「本郷」「城出下」の小字地名が残されており、ここが城跡であったことを示している。

しかし、現地に立ってみると城跡であった証明となる堀や土塁の跡をほとんど確認することができない。唯一城跡の北西端(千葉市埋蔵文化財センターの裏)に櫓台と考えられる高まりと、それに続く土塁、それと城跡南

西端の臺地の脇に土塁状の高まりが認められるに過ぎない。特に台地中央部では、堀を入れいくつかの郭に区画するのが通常の築城方法なのであるが、そのような状況は全くといっていい程認めることができない。

小弓城跡に現在城郭遺構がほとんど確認できないことは、古い地形図や絵図を見ても城郭遺構を全く読み取ることができないことから、近年の耕作や宅地化によって引き起されたものではなく、かなり古い段階で堀は埋められ、土塁は崩された可能性が高いようである。この点については後に理由を考えてみたい。

極論すれば、現在どこが城跡なのかかわからない小弓城跡であるが、歴史的にみれば千葉県内に十カ所程ある城跡の中でもトップクラスに位置付けられる城跡である。

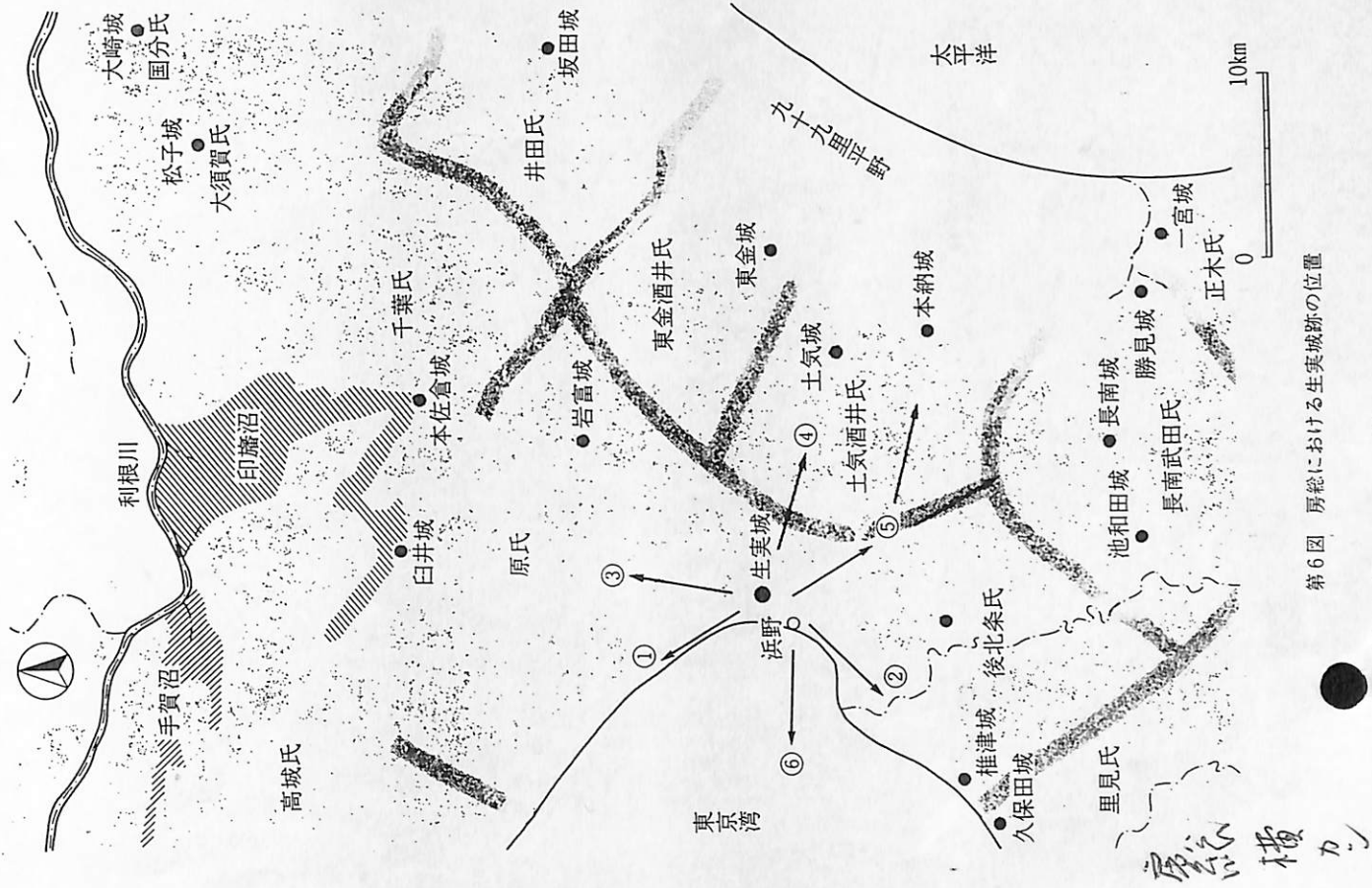
小弓城が歴史上最初に史料に登場するのは一六世紀の初めである。紫屋軒宗長という連歌師が、約半年にわたって関東へ旅に出たが、その時の旅の様子を「東路のつと」という紀行文(註一)に書き残している。この紀行文によれば、宗長は永正六年(一五〇九)一月二三日に一原宮内大輔胤高の小弓の館の前、小浜の村本行寺に宿泊したが、ここでは小弓城は小弓館として登場する。なお、小浜は現在の浜野(千葉市中央区浜野町)とみて

ている。

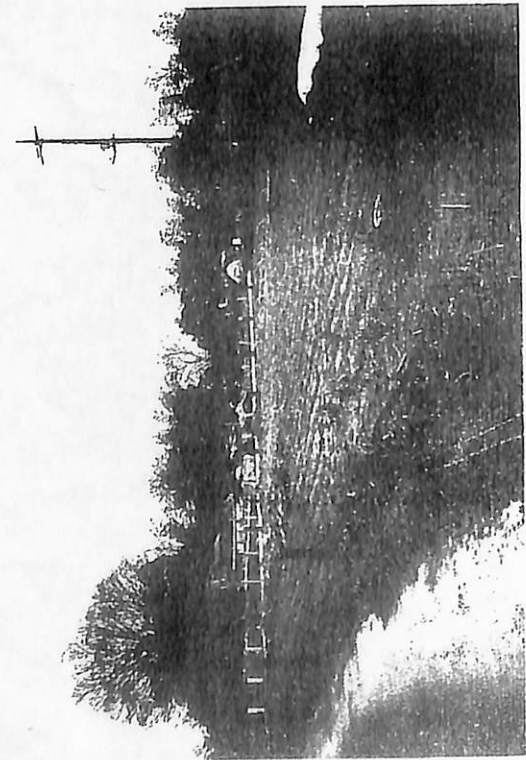
「東路のつと」からいえることは、①永正六年(一五〇九)段階では小弓城(館)の主は原胤高である。②直接の表現はないものの、猿樂や連歌が頻繁に開かれていたことを考えると、小弓城(館)の周辺は都市的な場が形成されていた可能性が高い。③浜野は市川・千葉方面と街道によって結ばれ、宿的な場として機能していたなどの点が指摘できよう。

ただ、問題となるのは、果して小弓館と小弓城が同一であったかである。同書の「原宮内大輔胤高の小弓の館の前、小浜の村本行寺」の記述から、小浜を現在の浜野とし、浜野にある本行寺が現在地かあるいは若干離れた場所にあったとしても、小弓の館の前に本行寺があるという記述には注意する必要がある。現在の小弓城跡と本行寺は直線距離で二㎞程離れており、この距離を果して小弓館の前といえるであろうか。

あるいは、生実藩蔵屋敷跡(浜御蔵)発掘調査で戦国時代の遺構・遺物が検出されている事実(註二)から考えると、原氏の日常生活の場である小弓館は浜野の低地上にあり、いざという時の詰城である小弓城は台地上に置かれていた可能性も考慮する必要があるであろう。



第6図 房総における生実城跡の位置



小弓城跡主郭部の現状

間違いないであろう。

宗長は、翌日から二日間千葉妙見社祭礼の早馬を見物したり、小弓館で猿樂や連歌を楽しんで一週間程滞在し

であろう。東京湾沿いに船橋・市川方面へのルート①と、西上総方面へのルート②、原氏の本拠である印旛沼岸の臼井城へのルート③、内房と外房を最短で結ぶ土気城へのルート④、本納城・長南城へのルート⑤、そして武蔵・相模への海上交通であるルート⑥と、四方八方に延びる交通路の結節点であったのである。

また、生実城と同様の視点で原氏の本拠である臼井城を考えてみると、海上交通こそないがそれに替わる河川交通(印旛沼・手賀沼・現利根川水系)と、陸上交通の要衝に臼井城は位置していたことがわかる。

通常本拠の城郭は領内の中央に置くことが多いが、原氏の場合は、前代の本拠である小弓城を含めて常に領域の端に置き、戦略的には不利になるが(註二)、交通の要衝を直接管理下に置くことによつて、そこから得られる経済権益を基盤として、戦国後期には下総第一の勢力を有することが可能になったのではないだろうか。

以上、戦国期を通してなぜ生実の地に拠点となる城郭が築かれてきたのかを経済・交通の視点から主に考えてきた。しかし、それらの視点の要である浜野湊にはほとんど触れることができず、今ひとつ海上交通との関係が不十分であった。浜野にある生実藩蔵屋敷跡(浜御蔵)

の発掘で戦国期の遺構・遺物が検出されていることは、蔵屋敷が戦国期の城郭を再利用している可能性があり、そうとすればそれは湊を保護するための海城となることから、浜野湊の重要性もより高まるであろう。

今後は、浜野湊の研究を進展させることと、生実城跡の発掘調査成果の刊行、小弓城跡の学術発掘の実施が待たれる。

最後に、本論を書くに当たつて『絵にみる図でよむ千葉市図誌』上・下巻を大いに活用させていただいたことを明記したい。近世の絵図と明治以降の地図・航空写真が対応し、古環境の復原や歴史背景を理解するのに大変参考となる資料であった。

また、本論を書く機会を与えて下さつた千葉市史編纂担当と、加賀利貞塚博物館の村田六郎太氏に感謝いたします。

〈註〉

- 一、伊藤敬校注・訳『東路のつと』『新編日本古典文学全集』48 中世日記紀行集 小学館
- 二、『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』昭和五七年度 千葉県教育庁文化課 一九八四
- 三、従来の解釈では、『快元僧都記』の記事を根拠に足利